

令和2年7月豪雨における 収集運搬の対応と課題

発表者名
熊本県八代市
循環社会推進課 田中

令和2年7月4日に発生した豪雨災害では、球磨川流域で甚大な被害が発生した。

八代市でも坂本町を中心に大きな被害が発生しました。



1. 令和2年7月豪雨の状況（八代市）

- 雨量 226.5ミリ

- 被害者数

死者 4名

行方不明 1名

重症 2名

軽傷 19名

- 住宅被害

全壊 : 147棟

大規模半壊 : 58棟

中規模半壊 : 12棟

半壊 : 90棟

準半壊 : 2棟

一部損壊 : 100棟

- 最終的に解体を行った件数（公費解体＋自費解体）

3 1 9 件

- 発生した廃棄物量

5 8, 9 8 4 トン（R3年度末時点）

- 市有施設で焼却処理した廃棄物量

1, 5 5 1 トン（R3年度末時点）

2. 当時の状況



+ ● ○



+ ● ○





発災 1 週間後 (比較的復旧が早い地域)



発災 1 週間後（比較的復旧が早い地域）



災害廃棄物仮置き場
（1 か所目：9900m²）



災害廃棄物仮置き場 (2か所目：6600m²)



地区に設けた災害ごみ臨時集積所 (サテライト)



3. 受援について

- 発災直後から多くの自治体や省庁より職員の派遣を受けた。
- 廃棄物部門でも、人員や車両の支援をいただいた。
- 熊本県内の市町村以外にも、京都市、神戸市、倉敷市より支援をいただいた。
- 廃棄物部門において、本格的な受援を受け入れることが初めてであった。

4. 受援とボランティアの必要性について

- 熊本地震以前は、プッシュ式の支援にマイナスのイメージを持っている部分もあった。
- 熊本地震の際に市役所自体も被災し、マンパワーが不足した。
- 高齢化が進む中で、自力での復旧作業の限界が見え始めた。
- マンパワーを補う手段として、ボランティアと行政の連携は有効であるとの認識ができた。

5. 災害廃棄物処理計画の策定への流れ

それまで

平成11年 台風18号

平成16年 台風16号

平成17年 台風14号

平成27年 台風15号

平成28年 熊本地震

で被害が発生した際に、仮置き場等による災害廃棄物の受け入れを行ってきた。

- 災害対応を繰り返すことで、部署としての経験値は蓄積されていった。
- 簡易なマニュアル（手順書）のようなもので、対応していた。
- 担当職員の人事異動によって対応能力が変動するリスクをはらんでいた。

6. 災害廃棄物処理計画の策定

- 熊本地震への対応において、部署又は個人の経験に基づいた対応の限界を感じた。
- 最初から様々な部署を巻き込んでおく必要性を認識。
- 平成30年度に災害廃棄物処理計画の作成に着手
 - ⇒平成31年4月に完成
 - ⇒令和4年10月改定

策定する際に心がけた点

- 仮置き場の場所の決定など部署間で調整がいるような面倒なことは、災害対策本部で決める。
- 人命第一の考え方を盛り込む
- 計画内容の検討の時点から、関連すると思われる部署を巻き込んでおく。
- 現場の運用については、担当部署主導になるようにする。
- 実際の現場に合わせて、様々な手法（仮置き場の設置、路線収集、サテライト方式）が取れるように、細かいことまでは決めない。

実際に入れた内容

災害廃棄物処理の仮置き場の設置の有無、仮置き場用地の最終選定は、「八代市災害対策本部」で決定する。

仮置き場候補地として検討する際に考慮する点

- ・公用地（県有地、国有地を含む）であること。
（未利用地であることが望ましい）

発災後仮置き場用地を選定（決定）する際に考慮する点

- ・救命・救急を優先する（自衛隊宿営地、消防・警察利用用地）
- ・候補地に対する他の土地利用（避難所、応急仮設住宅等）のニーズの有無を確認すること。

7. まとめ

- ・災害は、想定の上をいく。
- ・災害廃棄物処理計画は、あったほうがいい。
- ・膨大な計画よりも要点をまとめた計画がいい。
- ・現場のマニュアルの延長のような計画からでもいい。
- ・プッシュ式の支援は、大変ありがたいシステムである。
- ・ボランティアの活用には、事前の準備が重要である。

ご清聴
ありがとうございました。



+



o



.

